長島の死

坂口安吾

青空文庫

長島に就て書いてみたところが、忽ち百枚を書いたけれども、重要なことが沢山ぬけてゐるやうな気がして止してしまつた。長島は私の精神史の中では極めて特異な重大な役割を持つてゐるので、私の生きる限りは私の中に亡びることがないのである。従而、今あわただしく長島の全てに就て書き尽すまでもなく、これからの生涯に私の書くところの所々に於て、陰となり流れとなつて書き尽されずには有り得ないであらう。今は簡単に長島の死に就て書くことにする。

私の知つてゐるだけでも、長島は三度自殺を企てた。その都度、遺書、或ひは死に関する感想風のものを受けとるのは私の役目——全く役目のやうであつた——であつたし、同時にその家族に依頼を受けて、死に損つた長島と最初の話を交すのも私の役目であつた。考へてみると、実に根気よく自殺を企て、根気よく失敗したものだと思ふ。無論、酔狂や狂言の自殺ではなかつたのである。一度は信濃の山奥の宿で、これは首を吊つたのだが、縄が切れて、血を吐いて気を失つて倒れてゐるのを発見された。次には横須賀の旅籠で、次には自宅で。これは致死量以上の劇薬を嚥みすぎて結局生き返つたのである。このほかにもやつてゐないとは言へない。一週間ばかりといふもの、連日つづけさまに死に就ての已に錯乱した感想を受けとつた記憶が二度ばかりあるが、その結果がどうなつたことやら私は忘れた。とにかく、毎年春になると一

種の狂的な状態になるのである。これは如何ともなしがたい生理的な事柄であるから、仕方がなかつた。

私は彼のやうに「追ひつめられた」男を想像によつてさへ知ることが出来ないやうに思ふ。その意味では、あの男の存在は私の想像力を超越した真に稀な現実であつた。尤も何事にさうまで「追ひつめられた」かといふと、さういふ私にもハッキリとは分らないが、恐らくあの男の関する限りの全ての内部的な外部的な諸関係に於て、その全部に「追ひつめられて」ゐたのだらうと思ふ。たとひ恋をかちえても、名声をかちえても、産をなしても、恋を得たことによつて名声を得たことによつて一人あくことなく追ひつめられずには止まないたちの、宿命として何事によらず追ひつめられるたちの男であつたのだらうと考へてゐる。彼の死にあひ、さて振返つてみると、実に凄惨な男であつたと言はざるを得ない。彼ほど死を怖れた人間も尠(すくな)いのであらう。彼の自殺といへども所詮は生きたいためであつた。彼もそれを百も承知してゐたが、彼の生涯を覆ふた一種奇怪なポーズは、彼を自殺へ走らせずにはやまなかつた。全く、彼の奇怪なポーズは私の想像能力をも超えてゐるかに思はれる。殆んど現実の凡ゆる解釈を飛びこえて、不可解な宿命へまで結びついてゐるとしか考へられない。

丁度このクリスマスの前夜に、また長島の危篤の電報を受けとつた。ところが、十二月の初めに、四五通のやや錯乱した手紙とここへ載せてある「エスキス・スタンダアル」の原稿とを受けとつてゐたので、又自殺するのだらうといふ予感を懐いてゐた。馴れてゐるので驚きも慌

てもする筈はない。さりとてこの自殺は私の力でどうすることもできないことが分つてゐるので、ほつたらかしておいたのである。寧ろ、これまでの例で言ふと、なまじひに留めだてに類することをしたばかりに却つて死に急がせる結果をまねいたこともあるので、私としては、ほつたらかしておくほかに手段がなかつたのである。

電報によつて赴いてみると、今度は自殺ではなかつた。脳炎といふ病気であつた。脳膜炎どころの話ではなく、膜を通り越して完全に脳そのものをやられてゐるのだといふ。むろん完全な発狂である。治つても白痴になるばかりだといふ。昏睡におちてゐた。

医者はこの昏睡のまま死ぬであらうと言つてゐたが、再び眼を覚した。のみならず、眼を覚すこと十二時間の後、再び昏酔におち、今度こそそのまま死が来るだらうと予定されてゐるのに丁度十二時間の昏睡ののち、またまた覚めた。斯うして、生きることが已に狂的な不思議な状態が一週間ほどつづいて、一月元旦、正しく言ふと元旦をすぎること五分ののち昏睡のまま永眠した。

この昏睡の間は体温三十六度であるが、覚めたときは四十一度になつてゐる。その体温表は、丁度過ぐる大震災の地震計を見るやうなものである。生きながら、その顔は死の相であつたし、視覚も触覚も聴覚も、或る時は殆んど失はれてゐた。腹から下は死の冷めたさであつた。頻きりに苦痛を訴へて見るに忍びない姿であつたが、ことに私は、彼と話を交すために——彼は頻りに私の名を呼ぶので——その口へ耳を寄せる時、殆んど死臭のやうな堪えがたい悪臭の漂ふ

のには無慙な感をいだかされた。死んでからの顔の方がはるかに安らかであつたのである。ポオの小説に The facts in the case of Mr. Valdemar といふ物語がある。ある男が、催眠術によつて人間の生命を保ちえないものかと考へて、瀕死の病人に催眠術をかける。丁度死んだと思ふ頃、呼びさまして話しかけてみると、自分はもう死んでゐると病人は言ふ、さうして断末魔よりも深い苦痛の声をもつて苦しみを訴へるのである。それからの連日二十四時間毎に呼びさまして話しかけると、その表情その声は一日は一日に凄惨を極め、遂ひに術者も見るに堪えがたい思ひとなつて術をとくのであるが、とたん肉体は忽然として消え失せ、世に堪えがたい悪臭を放つところの液体となつて床板の上に縮んでしまふ。——大体、こんな筋の話であつたと記憶してゐるが、私は長島の危篤の病床で、この物語を思ひ出してゐたのである。一つには長島もこの物語を読んでゐたからであつて、ある日私にそのことを物語つた記憶が残つてゐたからであらう。そのことと関係はないが、彼は私への形見にポオの全集とファブルの昆虫記の決定版とを送るやうにと家族に言ひ残して死んだ。

彼の病床での囈言（うわごと）は凄惨であつた。一見したところ、とりとめのない支離滅裂な叫びに思はれるのであるが、結局のところ、彼の宿命的な一生の間、このどたん場へまで追ひつめられてきた最後の一行ばかりを断片的に言ひ綴つてゐるのであるから、彼の精神史の動きを知る私には、正気のそれよりも激しい実感が分つたのである。

私が、君のエスキス・スタンダアルはいいものであると割に簡単な気分で言つたところが、

突然長島は狂暴な眼を輝やかして嘘だ嘘だと絶叫しはぢめた。そこで私が、斯ういふ君の最も本質に属するところの仕事に就て人の言葉を相手に嘘だの本当だのと喚いてみても仕様がないであらう、それよりも莫迦者の寛大さをもつて長閑な道化役者の心をもつてきく方がいいらしいと言つたところが、彼は急に激しい落胆を表はして、でも俺はそれよりも弱い人間なんだと消然と呟いた。これは決して気が狂つてゐないと私は思つた。むしろ正気の人間よりも鋭敏である。私の場合で言ふと、私は酒に酔つたある瞬間に時々この状態の鋭敏さを持つことがある。狂人の全てが斯うではあるまいが、これが狂人なら狂人は恐るべき存在だと私は思つた。

狂人のこの驚くべき鋭敏さには彼の父親が気付いてゐた。なぜなら、長島の父は、いはば長島の一生恐るべきライバルの一人であつて、彼の精神史は常に父を一人の敵として育つてゐたからだらうと思ふ。長島の父は政治家であるが、彼と性格が相似てゐる上に、腹と腹で睨み合つては病弱な長島のとうてい太刀打の出来難い線の太さと押しの強さがあるやうに考へられる。恐らく彼は父親に精神的に圧迫され通してゐたのだらうと思ふ。彼が危篤の病床で父親に叫んだ言葉は、「パパ俺は偉いのだ」といふ一言であつた。ところがパパは一言も答へなかつた。答へなかつたにも拘らず、彼は最後まで子供は決して気が狂つてはゐないと断言してゐた。ちなみに、彼の家族は皆彼は発狂したと信じてゐたのである。さうして、さう考へるのは決して無理ではなかつたのである。

父対長島の場合のやうに、身を以て絶叫してゐるにも拘らず返答がないといふこと、これは

同時に彼対友人、いな、彼対人生の関係でもあつた。併し人々は故意に彼を苦しめるために返答しなかつたわけではないだらうと思はれる。所詮、この男は、この悲惨な結果を生まざるを得ない宿命人であつたのだらう。

長島は危篤の病床で私一人を残して家族に退席してもらつてから、私に死んでくれと言つた。私が生きてゐては死にきれないと言ふのである。さうして死んだらきつと私を呼ぶと言つた。死ぬまぎわには幽霊になつて現れるなぞとも言つたのである。さうして私に怖ろしくなつたらうと狂気の眼を輝やかして叫ぶので、私があたりまへだと言つたら、世にも無慙な落胆を表はしてそれつきりして沈黙してしまつた。

併し、正直に白状すると、私はそれほど怖くはなかつたのである。彼はその悲惨な宿命として、彼の如何なる激しい意志をもつてしても到底私を怖がらしたり圧迫したりすることは出来ない因果な性格を持つてゐる。私は無神経なること白昼の蟇の如き冷然たる生物であつて、デリケートな彼はその点に於て最も敵対しがたいのである。それにも拘らず、彼は私のやうな鉄の意志、鉄の無神経をもつところの人間を相手として友達に選び、それに抵抗しつつも最も親しまざるを得ない悲劇的な性格を与へられてゐたのであらう。

私は彼の生前によく彼に言ひ言ひしたのであるが、君は僕に親しむよりも葛巻義敏、本多信、若園清太郎のどれかを選ぶ方がいいのだと。その度に、彼はさらに私に激しく反抗するかのやうな、蒼白な、表情のない顔をして決して一言も答へはしなかつた。

断つておくが、長島と私との間には世間的なライバルとか、恋敵とかいふ関係は完全になかつた。のみならず、さういふ世間的な関係はたとひ有つたにしても悲劇的な確執を生みがたい奇妙な和合と温かさがあつた。全てはそれよりもより悲惨な性格の中にあつたのである。のみならず、悲劇的といふ言葉はただ彼にのみ当てはまるのであつて、私自身は事彼に関する限り永遠に帝王の如く完き無神経をもつに止まるといふ宿命のもとにあつたのである。

彼の宿命的な不幸は、更に彼の病弱の中にもあつた。春の訪れる度に狂的な精神状態になるといふこのことである。つまり、彼の感受性はとぎすましたやうに鋭敏になるにも拘らず、逆に表現の能力を阻碍(そがい)されるといふ悲劇的な一事である。これは生理的に如何ともなしがたい事柄であつたのだらう。

彼は恐ろしく鋭敏な、頭のいい男であつた。ことに語学には天才であつた。私と一緒にラテン語を習ひだしたのであるが、私が辞書をひくにも苦労してゐる頃に、彼は已に原書を相当楽に読みこなしてゐた。その当時は私も語学には全力を打ち込んでゐた頃で、別に怠けてもゐなかつたのであるが。

さりとて、彼はディレッタントと呼ぶべき人間でもない。彼の生活はディレッタント風の女性的なものではなく、あまりに凄惨で生ま生ましかつた。併し、ディレッタント式の宿命的な眼高手低は、生理的にどうすることもできなかつたのである。

晩年彼は株に手を出してゐた。父親の影響で——或ひは寧ろ父親にすすめられて、この方面

に関係してゐたらしいが、彼はその方面では立派に黒人（くろうと）の素質があつたし、くろうと以上の或る神秘的な能力さへあつたらしい。さうして、女から女へと盛んに惚れてゐたさうである。このことは彼の妹さんから最近きかされて吃驚（びっくり）した話であつて、実のところ、私は彼のさういふ生活は想像してみたこともなかつた。なぜなら、彼は私等の前では女の話は全くしなかつたからだし、それらしいどんな素振りも見せなかつたからである。彼が私等の前で被つてゐた仮面に就ては最も簡単な解釈で片附けることも出来さうであるが、私は今さう簡単に片づけることができない気持でゐる。彼のポーズは一見自明のやうに見えて、実は殆んど現実のあらゆる解釈を超越した不可解な彼の宿命に結びついてゐるとしか考へられないのである。さうして、これは彼の宿命であるから今更如何とも仕方のない事柄であつたらうと思ふのだが、もしも彼が私等の前で女に惚れた話が平気で言へたなら、彼はまだこの年齢でここまで追ひつめられずに済んだのだらうと思はれるのである。尤も、このことは最後に鉄の断言をしてもいいが、彼は本気で女に惚れきれる男ではなかつたのだ。さうして、時々泣きぬれたりしたが、決して本気で泣ききれたり笑ひきれたりする男ではなかつた。常に自分自身に舌を出してゐるところの、も一人の自分を感じつづけてゐるところの宿命的な孤独人であつた。世に最も悲しく、最も切ないところの宿命の孤独人であつたのである。彼の死が不幸であるか幸福であるかは、今私にはとても断定はできない。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集　01」筑摩書房
　　1999（平成11）年5月20日初版第1刷発行
底本の親本：「紀元　第二巻第二号」
　　1934（昭和9）年2月1日発行
初出：「紀元　第二巻第二号」
　　1934（昭和9）年2月1日発行
※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。
入力：tatsuki
校正：伊藤時也
2010年5月19日作成
2016年4月4日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

長島の死

坂口安吾

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/